

「高知紀行 (10)」

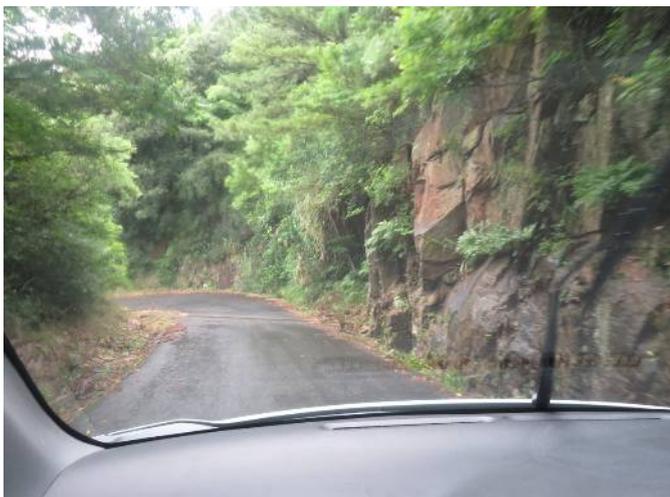
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka

沖の島の北部は、主として新生代新第三紀中新世(およそ 1500 万年前)の花崗岩で構成されています。表土(土壌)を少し掘れば、どこでも花崗岩につきあたるといことです。



花崗岩は火成岩(深成岩)の一種で、「硬い岩石」という印象があります。しかし地下深層のマグマが固結してから 1500 万年も経過しているため、さすがの花崗岩も風化が進んでいます。露頭(地層の一部が地上の露出した場所)では、風化が進んでいます。硬いはずの花崗岩も、指で簡単に崩せる場合もあり、写真のような巨晶石英も容易に入手可能です。



また、沖の島の地層の特徴として、道端の岩石もコンクリートやブロックで固められていることがほとんどないので、各所で露頭が観察できることが挙げられます。岩石観察の巡検には誠に適した場所です。



(陸地測量部地形図/昭和 12 年製)

次に案内していただいたのは、島で唯一の「製塩所」です。島の中部の「古屋野(こやの)」という地点にあります。島で一番大きな集落「母島(もしま)」から南に少しいった地点です。戦前の地形図を見ると、かつては一つの集落が形成され、定住者もいたことが伺えますが、現在はこの製塩所しかありません。



この製塩所の最大の特徴は「流下式製塩法」を用いていることです。製塩方法には、塩田に海水を引き込んで天日で乾燥させる「天日製塩法」、濃縮した海水を塩釜で煮詰める「煎熬採塩法」、「イオン交換膜製塩法」などがあります。沖の島の製塩所で採用している「流下式製塩法」は、本来は「枝状架」と呼ばれる枝状の器具に海水や塩分を含んだ温泉水を流下させ、余分なミネラルを吸着させ、水分も蒸発させる方法です。

この施設では枝状架ではなく、特殊な繊維膜を使っていました。しかし大変な手間と労力がかかる方法なので、日本では流下式製塩の施設はほとんど残っていません。沖の島の製塩所は大変貴重な施設と言えます。



流下架だけでは塩はできません。濃縮された海水は、ビニールハウス内の「塩田」に移されて、更に水分を蒸発させます。火力を使わずに、自然の風や天日だけで製塩している点が素晴らしいです。



製塩も全自動ではなく、時々比重計を使って、濃縮された海水の濃度を計測しています。



また、濃縮された海水からは塩分（塩化ナトリウム）よりも先に、他の塩（えん）・・・が沈殿します。雑塩が多いと味が落ちるので、網ですくって除去します。



これが除去された雑塩です。ちょっとなめてみましたが、ほとんど塩辛くなく、どちらかといえば苦い味でした。恐らく塩化マグネシウムなどの成分でしょう。



この施設で製造された天日塩は市販されています。手間をかけた大粒の塩は、素晴らしい味でした。「宿毛市推奨品」というステッカーも貼られていました。



沖には「姫島」が見えます。この島も宿毛市に含まれますが、現在は無人島で釣りの人が時々チャーター船で訪れる程度だそうです。